NARASIA | STUDY

奈良のモダニズム
――鉄道・歌劇・映画――

福家 崇洋
FUKE Takahiro

ユーラシア研究フォーラム2019 2019／2／3於奈良県立大学
「奈良のイメージを解凍する」第一回「ウタう奈良」登壇発表より

はじめに

初めまして、福家と申します。今日は、「奈良のモダニズム ――鉄道・歌劇・映画 ――」というタイトルで報告させていただきます。

まず、今日の報告の趣旨について説明いたします。

今日の総合テーマというのは、「奈良のイメージを解凍する。」というものです。鹿とか大仏とかで語られる奈良をどのように捉え直すかということです。奈良の場合、現代が常に古代と接続しているというイメージがあります。このため、奈良は近代のイメージが希薄と言われています。

そこで、今日は奈良において近代文化というものがどのように受容されて、定着していったのかという問題について考えたいと思います。

タイトルにある「モダニズム」というのは、「近代主義」の意味ですが、今日の報告では、近代においてあらわれた新しい文化的傾向という意味で使いたいと思います。ただ、奈良のモダニズムというと、ちょっと漠然としていますので、二つの分野と二つの地域について、今回は着目しました。

分野は、まず歌劇と映画です。地域は、生駒とあやめ池です。これらを鉄道が横ぐしとなって結びつけていることを、後で見たいと思います。

今日は、近代奈良の多様さ（NARAS）を確認しつつ、そこから奈良らしさ（NARANESS）を皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

工事中の旧生駒トンネル東坑口（近鉄『50年のあゆみ』）
提供：近鉄グループホールディングス株式会社

生駒山鋼索電気軽便鉄道ケーブルカー木製車両（近鉄『50年のあゆみ』）
提供：近鉄グループホールディングス株式会社

「遊覧鉄道」の敷設

始めに、生駒と歌劇から見ていきたいと思います。重要なのは「遊覧鉄道」の敷設ということになります。

まず、大阪電気軌道鉄道株式会社のことですが、これは後の近鉄になるわけです。１９１４年に上本町から奈良まで開通しています。これは参詣客が目当てでして、当時の文献では「遊覧鉄道」と記されています。この新駅開設によって、生駒停留所から宝山寺への新参道が発達して、露店とか料理屋とか、あとは土産物屋、旅館ができて、芸妓も住むようになります。

もう一つの鉄道が、大軌（大阪電気軌道鉄道株式会社）とほぼ同じ時期にできました。生駒停留所から宝山寺をつなぐ生駒山鋼索電気軽便鉄道です。これは日本初のケーブルカーと言われています。設立当初から大軌の資本も入っていまして、１９２２年、大軌に合併されます。そのときに合わせて、宝山寺から生駒山上の延長申請も行われました。

行楽地の形成と歌劇

このころになると辺りも発展しまして、生駒芸妓株式会社などが設立されていますし、生駒新道を中心に生駒新地の形成がさらに進んでいきます。

こうした開発のモデルとなったのが宝塚です。宝塚は、同じように鉄道会社がかかわっています。箕面有馬電気軌道という会社で、現在の阪急宝塚本線に当たります。この会社は、１９１２年に日本初の室内プールを備えた宝塚温泉パラダイスというものを開設するわけです。この温泉をテコに、京阪神から乗車客をふやそうという戦略になります。ここには動物園が移設されただけでなく、１９１３年に温泉客向けのサービスとして「宝塚歌唱隊」が結成されます。これが後の「宝塚歌劇団」になります。こうした戦略を大軌も採用していきます。

生駒座　（『日本ミュージカル事始め』）提供：清島利典氏

生駒山の西、今の近鉄奈良線の石切駅の近くに日下停留所というのが当時ありました。これは１９１４年に設置されていまして、１９２０年に日下温泉土地という会社ができまして、土地経営であるとか温泉経営を始めていきます。ここには、さらに遊園地とかミニ動物園とか舞台が設けられてきまして、行楽地化していくわけです。また、１９２２年に少女歌劇団がこの温泉でデビューを果たしたという記録もあって、これは京都文教大の鵜飼正樹先生が調べておられます。

「生駒歌劇」

これとほぼ同じ時期に、生駒でも歌劇が誕生します。これが「生駒歌劇」です。この歌劇を設置したのが福井甚三という人物で、彼は奈良選出の代議士でもありました。福井は生駒土地会社を設立しまして、土地経営などを試みるわけです。この土地経営というのは、土地をほかの業者に貸したりとか売ったりとかして、料理屋とか旅館を建てて、収益を上げていきます。ただ、当初は開店休業状態で、１９２１年ぐらいから活動を始めて、特に文化事業のほうに力を入れていくことになります。具体的には、劇場を設けて歌劇を招致しました。劇場は、１９２１年に大阪の新町遊郭というところから演舞場を買い受けて、それを生駒に移設します。

歌劇の招致は、さらに東京の帝国劇場とか浅草オペラを牽引してきた伊庭孝や佐々紅華という人物を生駒に招聘します。さらに彼らを中心に生駒歌劇技芸学校というのを設けて、俳優の養成にも努めていくことになります。

ここに建物と作家と、あと俳優がそろって「お伽歌劇」や「入鹿物語」が上演されたという記録が残っています。ただ、実質的に活動したのは１９２１年８月から11月までです。これは経費がかさんだ割に客入りが悪かったということで、３ヶ月で終わりました。

11月の京都公演ぐらいの後に休演して、事実上解散してしまいます。しかもその後、伊庭と彼を招聘した福井の間に、脚本料をめぐって裁判が起こって、泥沼化していくわけです。最終的には伊庭側が勝訴するわけですが、その後、伊庭はオペラを離れて音楽評論家になって、生駒と歌劇のはかない関係は、ここに終わりを告げます。

作家・直木三十五と奈良

次に、歌劇のほうから視点を変えまして、映画について見ていきたいと思います。

奈良と映画の関係を見る上で重要な人物というのが、直木三十五という人物です。これはペンネームで、本名は植村宗一という人物です。

直木は、実は奈良とかかわりのある人物で、両親が奈良出身です。両親は、北葛城郡広陵町の大野というところで庄屋をしていました。両親が大阪に移ってから生まれたのが直木です。その後も奈良にかかわりまして、一時期、吉野郡の尋常小学校の教員をしていたときもありました。ただ

長くはなくて、すぐに早稲田大学に入学するために上京しています。現在、直木は大衆小説家として知られていまして、「直木賞」も彼の名前をつけてできたものです。

実は、彼は大衆小説家として売れる前は、映画の製作にかかわっていました。例えば、「日本映画の父」と言われる牧野省三の家に、彼は一時期居候していました。映画製作に関心のあった直木は、奈良市の三条新道というところ、今の近鉄とＪＲを結ぶところの三条通りの近くですが、そちらの方に聯合映画芸術協会という映画制作のプロダクション

直木三十五　（『直木三十五全集』別巻）提供：示人社

をつくります。これは１９２４年末ですけれども、前年に関東大震災が起きまして、直木は活動の場を関西に移していました。

この協会の撮影監督部に牧野省三の名前があります。また、演技部には澤田正二郎とか市川猿之助の名前が記されています。澤田は新国劇というところで大衆演劇の人気役者でした。一方、市川猿之助は今も知られていますけども、歌舞伎役者で、２代目です。もともと舞台で人気のあった彼らを映画の中に登場させたということは、この協会の映画の特徴と言えるわけです。

伊藤大輔、中川紫郎と奈良

もう一つ、奈良と映画の関係ということで、伊藤大輔と中川紫郎について見ていきたいと思います。いずれも日本映画の草創期の著名な監督たちです。

伊藤は当初、帝国キネマに所属していましたが、そこと分裂する形で生まれた東邦映画製作所に所属します。しかし、その製作所も数カ月で解散したために、浪人になります。そこで彼に目をつけたのが直木三十五です。直木に誘われる形で映画製作に協力していきます。

当時、直木は奈良に聯合映画芸術家協会を設けていましたので、伊藤も奈良に伊藤映画研究所を設立し、そこで直木と一緒に映画をつくっていきます。例えば「日輪・前篇」という映画を伊藤が監督していますが、製作は直木の聯合映画芸術家協会と伊藤映画研究所が担当しています。ただ、配給問題で牧野とこじれてしまって、協会との連絡を絶って、同じ

１９２６年に研究所を解散して、日活のほうに入社します。

もう一人の中川紫郎は、帝国キネマで監督を務めていましたが、一時期渡米して、帰国した後に奈良ということで、直木や伊藤の映画会社と関係がありました。

同じ時期に奈良ということで、直木や伊藤の映画会社と関係がありました。例えば、中川映画製作所の第１作目に「室町御所」という作品がありますが、助監督を牧野省三の長男の正唯という人物が務めていますし、脚本を直木三十五が務めています。また、それ以外にも聯合映画芸術家協会とか、マキノ・プロダクションと、製作とか配給で提携していますし、協会の映画も中川の貸しスタジオを使って撮影されたものがあると言われています。

また、中川紫郎と伊藤大輔というのは、帝国キネマで先輩後輩の間柄ということもありまして、中川の影響は伊藤大輔にも及んでいます。伊藤は奈良で映画製作の会社の看板を掲げたと先ほど申しましたが、これは中川の製作所において看板を掲げたと言われています。

このように、直木を初め、伊藤、中川が奈良を拠点とすることで、草創期日本の映画が生まれていったということになるわけです。

市川右太衛門と奈良

奈良と映画の関係で最後に見ておきたいのが、時代劇のスターだった市川右太衛門です。皆さんご存じかもしれませんけども、彼が映画とかかわるきっかけは、牧野との出会いです。牧野から誘われて、こちらも有名な俳優であった阪東妻三郎の後釜として起用されまして、次第に人気を博していくことになるわけです。特に有名だったのが「旗本退屈男」シリーズで、これは１９３０年から始まって、戦時中と敗戦後を除いて１９６３年まで続きます。

また、彼は俳優だけではなく、映画製作の独立プロダクションを立ち上げます。その拠点となったのが、あやめ池です。市川は、１９２７年にあやめ池にいわゆる通称右太プロという事務所と撮影所を設けまして、映画を製作していきます。この設置には大軌、つまり後々の近鉄の支援があったと市川は回想しています。

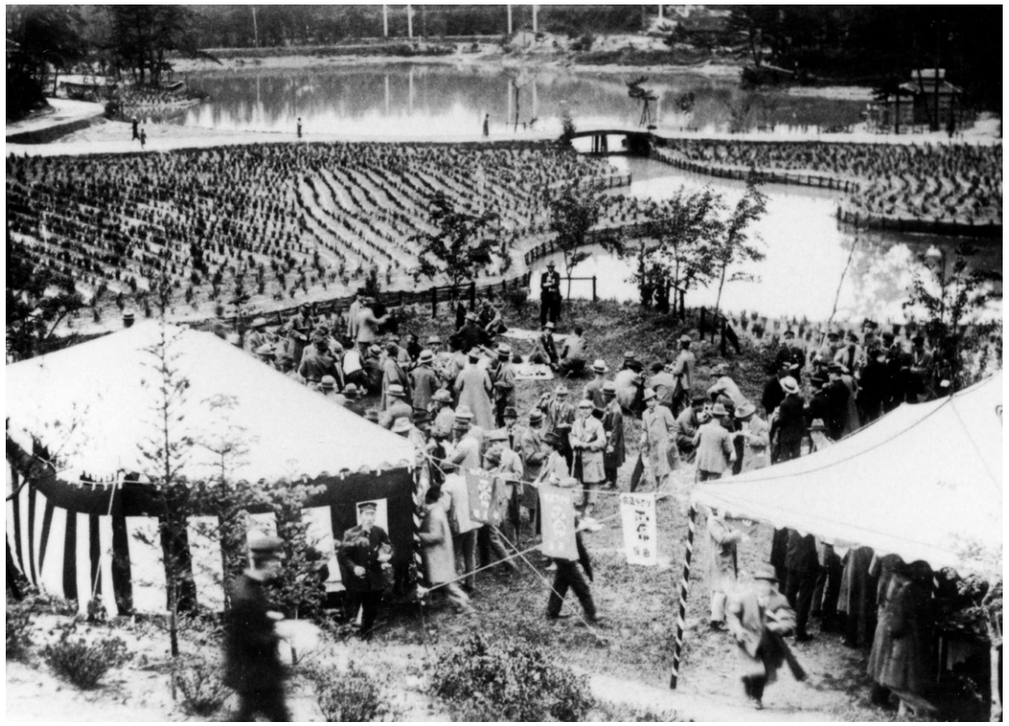
あやめ池の開発

ここで、これまでの流れをちょっと振り返ってみたいと思うのですが、まず生駒に注目しまして、歌劇の受容という点を見てきました。次に、映画に注目して、直木、伊藤、中川、市川に言及しながら、映画製作の拠点が奈良市からあやめ池に移っていくというところについて見てきました。

次は、そのあやめ池の開発について見ていきたいと思います。

なぜ、市川はあやめ池に映画事務所を設けたのか。また、なぜ大軌がそれを支援したのか、ということについて見ていきたいと思います。

右太プロが設けられた１９２７年の４年前に、大軌の菖蒲（あやめ）駅が臨時駅として設置されまして、翌年、常設駅になります。大軌は駅を設けるだけではなくて、周辺を行楽地化していくわけです。その象徴が、１９２５年に設けられたあやめ池遊園地になります。これも大軌が計画



あやめ池遊園地開園当日（T15. 6. 11）（『近畿日本鉄道100年のあゆみ』）
提供：近鉄グループホールディングス株式会社

して、駅の北側に開園します。周遊道路や花菖蒲園が設けられて、入場無料ということもあって、戦後まで多くの人に親しまれる施設となりました。

さらに生駒と同じように、１９２９年ぐらいから駅の南側のほうに新地が形成されていきます。検番という芸者の登録とか取り次ぎなどを行う施設や、料理屋や、あとは置屋という芸者を抱えるところ、そうしたところの組合なども結成されました。

また、遊園地と並んで目玉の施設だったのが、駅南の温泉場です。これもやはり大軌がつくりまして、著名な建築家である村野藤吾が設計いたしました。彼は近鉄の本社であるとか、あるいは橿原神宮前駅など、近鉄関係の建築を数多く設計しています。温泉場もその一つということになるわけです。こうした背景があって、右太プロも遊園地内に設けられたということがわかります。

菖蒲池温泉場　（『大阪電気軌道株式会社三十年史』）
提供：日本経済評論社

生駒の開発

こうした開発は生駒でも行われていましたが、１９２０年代後半にさらに開発が進みます。生駒にも１９２９年に生駒山上遊園が設けられました。今でも近鉄グループ会社によって運営されています。

また、生駒から歌劇はなくなったのですが、新地の方にダンスホールが２軒できまして、ダンサーを１００人ほど抱えていました。１９２０年代後半から３０年代にかけて流行したダンスホールというものが生駒の方にも及んでいたことが確認できます。

ドイツ出身の著名な建築家であるブルーノ・タウトという人が奈良の方も手がけていまして、生駒の方も訪ねています。彼は、ナチス・ドイツの迫害を避けて、１９３３年に来日しますが、京都を中心に奈良の方にも足を運んでいます。この前後に、大軌からタウトに「山上小都市」の設計が依頼されています。山上のホテルとか別荘とかコテージをドライブウェーで結んだ小都市、それをつくってほしいという計画を大軌から受けることになるわけですね。しかし、最終的に大軌側が及び腰になって、実現することはありませんでした。

生駒山上遊園の飛行塔　（『大阪電気軌道株式会社三十年史』）
提供：日本経済評論社

行楽地化の衰退

こうした大軌沿線の行楽地化も１９３０年代から４０年代にかけて、次第に終息に向かっていきます。

まず、１９３６年に右太プロが京都へ移転します。この撮影所は、後に右太衛門の実兄だった山口天勝という人物が全勝キネマという会社を立ち上げて、映画を撮り続けていきます。ただし、１９４０年に松竹の傘下に入って、翌年、撮影所自体も閉鎖されました。

また、あやめ池周辺でも住宅地開発が始まります。１９３７年に風致地区に指定されたこともありまして、大軌は駅の南側、蛙股池周辺の住宅地の分譲を開始しました。今では当たり前ですが、駅周辺の住民を増やすことによって乗客を増やしていこうという鉄道会社の戦略です。

また、１９３７年から日中戦争、１９４１年から太平洋戦争が始まって

いきまして、しだいに自粛ムードが広まっていくわけです。そうした中で、１９４３年に温泉場も閉鎖されます。戦争が終わっても再開とはいかずに、敗戦後は占領軍に接収されまして、キャバレーなどは慰安所として活用されました。

その後、１９４８年に接収が解除されるわけですが、１９５６年に閉鎖になっています。この同じ年に、大阪の松竹歌劇団（ＯＳＫ）が附属学校をここに移転します。

あやめ池と歌劇ＯＳＫ

最後に、あやめ池と歌劇とのかかわりを述べたいと思います。それが先ほど申しましたＯＳＫになるわけです。

ＯＳＫの歴史は古くて、１９２２年にできた松竹楽劇部にさかのぼります。この設立には、やはり宝塚の影響がありまして、創設に際して宝塚の関係者が招かれています。実際、あやめ池とかかわるのは戦後に入ってからで、１９５０年にＯＳＫはあやめ池で公演を行っています。

１９５６年には、あやめ池に３，０００人を収容できる円形大劇場が設けられて、以後、ＯＳＫもここで定期公演を行っていました。

その後、近鉄との関係というのは深くなっていきまして、１９７１年以降は近鉄グループの傘下に入って、以後、本拠地も大阪からこの円形大劇場に移して活動します。しかし、２００２年には近鉄からの支援も打ち切られて、翌年、解散になりました。さらに、その翌年にはあやめ池遊園地も閉園になってしまい、かつての活気が失われてしまいました。

円型大劇場　（近鉄『50年のあゆみ』）
提供：近鉄グループホールディングス株式会社

まとめ

まとめに入りますが、まず、時間軸で今日の発表を整理してみたいと思います。戦前、戦時、戦後ということで、３つに分けて考えたいと思います。

戦前の奈良で起きたこととして見たのは、鉄道敷設による行楽地化ということです。やや強引ですが、西ルートと北ルートに分けて考えてみたいと思います。西ルートというのは大阪との関係で、北ルートというのは京都との関係ということです。

まず、西ルートにおいて、鉄道敷設とともに日下や生駒で歌劇が実施されていきまして、同時に新地というものが形成されていきます。

一方、北ルートの方では、京都とつながる直木の映画団体が奈良にできまして、伊藤大輔、中川紫郎らの映画製作も奈良で行われます。

そして、このルートの結節点、つまり歌劇と映画の結節点となっていくのがあやめ池ではないかと私は考えます。あやめ池は、遊園地とか温泉場のほかに、右太プロができ、新地も形成されました。同じ時期に、生駒でも遊園地、ダンスホール、山上小都市構想なども登場してきます。

ただ、戦時期になると、行楽の要素が時局を背景として縮小していきまして、宅地化が進み、今日の報告では取り上げられませんでしたが、いわゆる国史関連事業などが推進されていくことになります。

戦後になると、再び行楽地化がなされ、あやめ池でも遊園地とか歌劇が活況を呈することになりますが、近年はややまた下火になっていると言えるかと思います。

OSKファイナルレビュー　（『近畿日本鉄道100年のあゆみ』）
提供：近鉄グループホールディングス株式会社

最後に、もう一度今日の報告の趣旨を振り返ってみたいと思います。

今日の報告では、近代の多様な奈良（ＮＡＲＡＳ）というものを見ることから、奈良らしさ（ＮＡＲＡＮＥＳＳ）について考えるということでした。

「ＮＡＲＡＳ」とは、きょうの報告で言えば、生駒歌劇であって、映画であって、遊園地であって、温泉場、ＯＳＫなどの行楽にかかわるものということです。

そこで、改めて奈良らしさ「ＮＡＲＡＮＥＳＳ」について考えてみたいと思います。私は普段、近代の歴史研究をしていますが、奈良に関する文献で、現在の奈良の漢字ではなく、寧楽（ねいらく）と読む「なら」も登場します。この寧楽ですが、寧とは安らか、穏やか、そして楽は楽しいということです。「ＮＡＲＡＳ」を踏まえて考えるならば、そこには一貫して、この寧楽というものを提供する素地が奈良にはあったのではないか、と私は考えています。

今日ご紹介しました行楽の種類というのはさまざまでしたが、そこには非日常的な空間というものを演出することによって、奈良に住む、あるいは奈良を訪れた人々に楽しさとか安らぎをもたらすということが考えられてきたのではないかと思います。この「奈良（寧楽）らしさ」を振り返る中で、鹿とか大仏とかステレオタイプじゃない奈良のイメージというものを見直していければいいのかなと私は考えています。

今日は、これら（下記）の文献に基づき発表させていただきました。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

（了）

ふけ・たかひろ

1977年、徳島県生まれ。京都大学人文科学研究所准教授。専門は近現代日本の社会運動史、社会思想史。著書に『戦間期日本の社会思想「超国家」へのフロンティア』（人文書院）、『日本ファシズム論争　大戦前夜の思想家たち』（河出書房新社）、『満川亀太郎　慷慨の志猶存す』（ミネルヴァ書房）がある。

【註・参考文献】

長谷川章『ブルーノ・タウト研究　ロマン主義から表現主義へ』ブリュッケ、２０１７

磯田啓二『熱眼熱手の人　私説・映画監督伊藤大輔の青春』日本図書刊行会、１９９８年

市川右太衛門『旗本退屈男まかり通る』東京新聞出版局、１９９２年

『ＯＳＫ50年のあゆみ』OSK Nippon Kagekidan

清島利典『日本ミュージカル事始め　佐々紅華と浅草オペレッタ』刊行社、１９８２年

大西由紀『日本語オペラの誕生　鴎外・逍遙から浅草オペラまで』森話社、２０１８年

山口修「伊庭孝」神林恒道編『日本の芸術論』ミネルヴァ書房、２０００年

山崎國紀『知られざる文豪　直木三十五』ミネルヴァ書房、２０１４年

佐伯勇編『大阪電気軌道株式会社三十年史』大阪電気軌道株式会社、１９４０年

『近畿日本鉄道　１００年のあゆみ』近畿日本鉄道株式会社、２０１０年

近畿日本鉄道株式会社『50年のあゆみ』近畿日本鉄道株式会社、１９６０年

鈴木勇一郎「生駒宝山寺門前町の形成と大阪電気軌道の郊外開発」『ヒストリア』205号、２００７年

伊藤直子「伊庭孝と生駒歌劇（１９２１）」『コミュニケーション文化』10号、２０１６年

田島良一「直木三十五と聯合映画芸術家協会」『日本大学芸術学部紀要』37巻、２００３年

安野彰「明治後期から昭和初期の大阪近郊における遊園地と花柳街　都市娯楽施設の史的研究」『学術講演梗概集　F-2　建築歴史・意匠』２００４年

遊郭・遊所研究データベース（http://yukakustudy.jp/）

中島大輔「私鉄による戦前期開発地域の変容　奈良市菖蒲池南園住宅地の事例」『立命館地理学』13号、２００１年

岡本澄「ＯＳＫ日本歌劇団の90年」『大阪の歴史』79号、２０１２年

「奈良拠点「少女歌劇座」大正期創設　巡業30年　ブーム一翼」『読売新聞』２０１６年２月24日付大阪夕刊。

「伊庭氏から訴訟」『読売新聞』１９２１年12月30日付朝刊

生駒市誌編纂委員会『生駒市誌』資料編Ⅱ、生駒市役所、１９７４年

生駒市誌編纂委員会『生駒市誌』資料編Ⅲ、生駒市役所、１９８０年

小川功「生駒山麓の遊園・観光開発計画の蹉跌　日下温泉土地を中心として」『生駒経済論叢』７巻１号、２００９年

鵜飼正樹「日本少女歌劇座　１９２８年の旅」『新社会学研究』６号、２０２１年